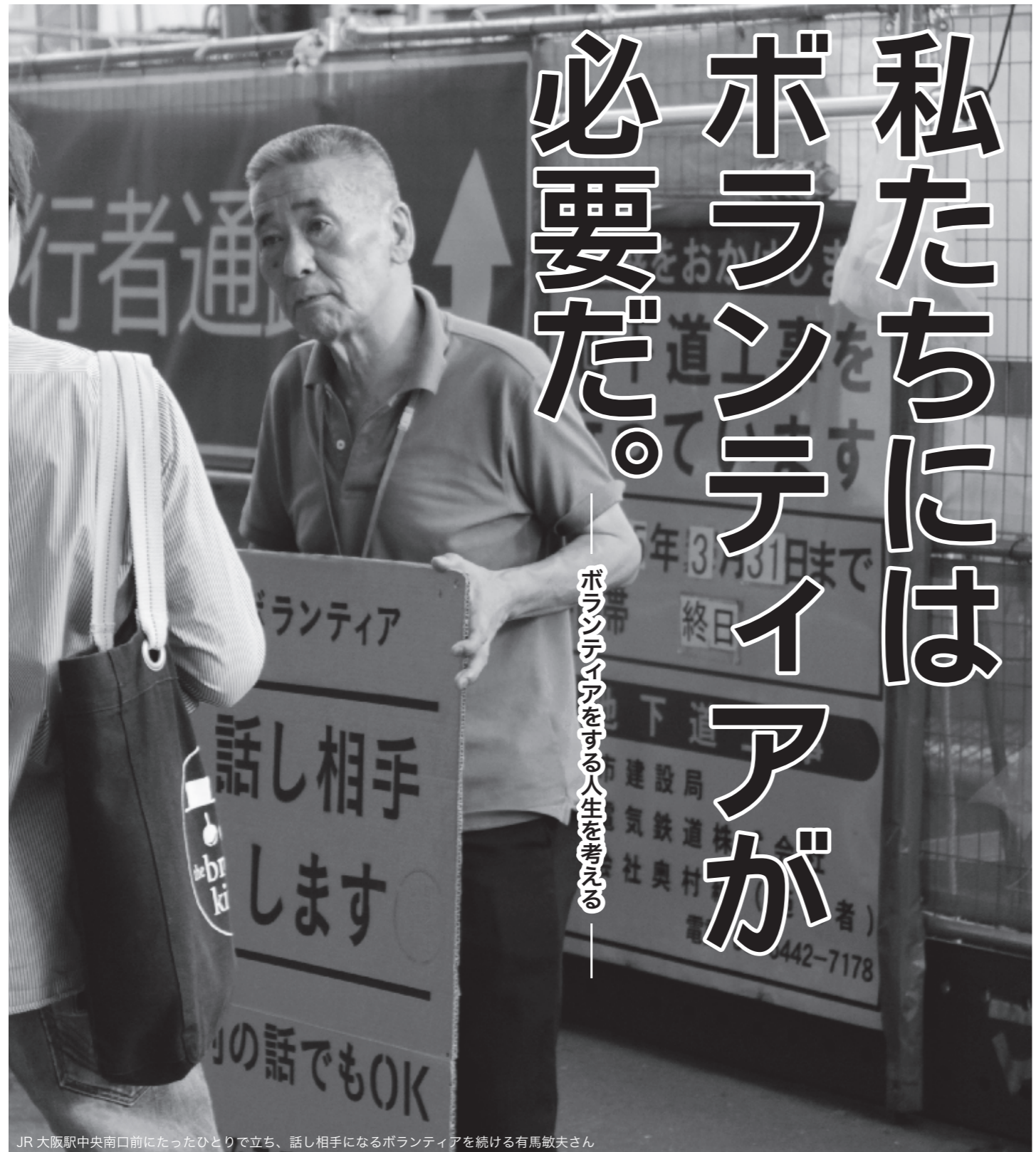


# つひまぶ 10月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.11 2017年10月2日発行 編集・発行：北区のおもろ通信団（浅香保ルイス龍太・田口和成・棚橋真理・平井裕三・松岡慧祐）協力：大阪市北区・奈良県立大学地域創造学部 連絡先：【mail】tsumimabu@gmail.com 【blog】http://tsumimabu.blogspot.jp（誌面に載せきれない情報はブログでね♡） 定価：0円 主な配布場所：大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンター・北園書館・大阪市住まい情報センター・大阪市北区社会福祉協議会・江之子島文化芸術創造センター・大阪市ボランティア・市民活動センターほか多数（配布場所はブログにて随時お知らせします） ※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。



## 私たちには ボランティアが 必要だ。

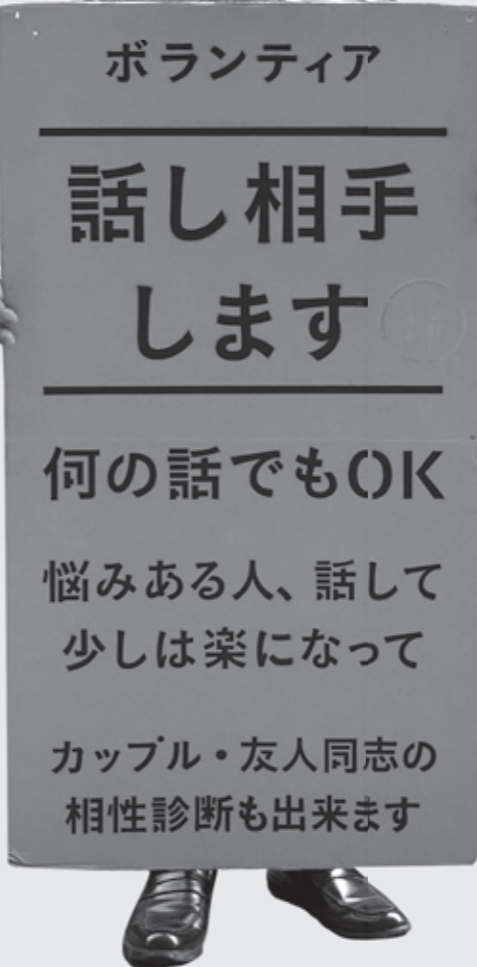
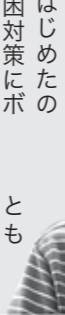
ボランティアをする人生を考える

JR 大阪駅中央南口前にたったひとり立ち、話し相手になるボランティアを続ける有馬敏夫さん

### ボランティア「話し相手します」 有馬敏夫さんは今日も大阪駅前に立つ。

「今日はもう4人も話を聞いたよ」。JR大阪駅中央南口前の雑踏に立ちながら、有馬敏夫さんはそう話す。手には、「ボランティア話し相手します」何の話でもOK 悩みある人、話して少しは楽になって カップル・友人同志の相性診断も出来ます」と書かれたボードを持っている。

「今日はもう4人も話を聞いたよ」。JR大阪駅中央南口前の雑踏に立ちながら、有馬敏夫さんはそう話す。手には、「ボランティア話し相手します」何の話でもOK 悩みある人、話して少しは楽になって カップル・友人同志の相性診断も出来ます」と書かれたボードを持っている。



「今日はもう4人も話を聞いたよ」。JR大阪駅中央南口前の雑踏に立ちながら、有馬敏夫さんはそう話す。手には、「ボランティア話し相手します」何の話でもOK 悩みある人、話して少しは楽になって カップル・友人同志の相性診断も出来ます」と書かれたボードを持っている。

「今日はもう4人も話を聞いたよ」。JR大阪駅中央南口前の雑踏に立ちながら、有馬敏夫さんはそう話す。手には、「ボランティア話し相手します」何の話でもOK 悩みある人、話して少しは楽になって カップル・友人同志の相性診断も出来ます」と書かれたボードを持っている。

「今日はもう4人も話を聞いたよ」。JR大阪駅中央南口前の雑踏に立ちながら、有馬敏夫さんはそう話す。手には、「ボランティア話し相手します」何の話でもOK 悩みある人、話して少しは楽になって カップル・友人同志の相性診断も出来ます」と書かれたボードを持っている。

#### 編集後記

「普段、無意識にボランティアという言葉を使っているけど、そもそもボランティアってなんなん？」。ある編集委員の疑問からはじまった今回のテーマ。編集会議で議論しても、時間が過ぎるだけで、一向に収拾がつかず。辞書で調べてみると、自ら進んで社会事業などに参加する人のことを指すらしいけれど、なんかしっくりこない。真面目な人、熱い思いを持った人、こだわりがある人、やりがいを求めている人、いろいろイメージが湧いてくるけど、はっきりとした答えが出てこない。今回、つひまぶで紹介するのは、一見するとクレイジーな方ばかり。でも、よく話を聞いてみると、あたりまえのことをあたりまえのようにやっていて、そこにおもしろい人生を過ごすためのヒントが隠されているような気がします。ボランティアの答えは人それぞれなのかもしれませんが。今号をきっかけに、みなさんもボランティアに興味を持ってくれたらいいなと思います。(Ta-yang)

「つひまぶ」ブログ 毎週月曜更新 http://tsumimabu.blogspot.jp

## 歓楽街の青色防犯パトロール・まち案内・

## まち歩き・ビルオーナー啓発、

## さくらねこ・迷惑駐輪・違法看板・落書き消し・

## 献血、里親制度推進、不動産業界の発展…

## 狂気のボランティアは、

## どこから生まれるのか？

# 難波 啓祐 さん

キタ歓楽街環境浄化推進協議会副会長・事務局  
<https://www.facebook.com/kitakan-kyojikai/>  
 公益社団法人 全国宅地建物取引業保証協会 代議員  
 一般社団法人 大阪府宅地建物取引業協会 本部理事 & 北支部 支部長  
 大阪府飲食衛生同業組合 本部理事 & 北支部 副支部長  
 ライオンスクラブ 国際協会 335B 地区 大阪曾根崎 LC 所属



月2回の夜の青色防犯パトロール。春と秋の連休初日のインパウンド向けのまち案内「梅田まち案内エスコート」。地元の歴史を見て歩いて振りかえり、まちを好きになってもらう、梅田のまち歩き。迷惑駐輪撲滅活動、その一環でおこなっている連合町会運営の駐輪場「ウメチャリ」。心ない壁の落書き消し。さらには落書きを消したあとのアート化。まちづくりのキーマンを担ってもらおうと、ビルオーナーを啓蒙する「ビル自主規制部会」。まちの問題をまちの人みんと共有する「環境浄化パレード」。ノラ猫とまちの共生を目指し、ノラ猫の不妊・去勢活動をおこなう「さくらねこプロジェクト」…。難波啓祐さんが副会長・事務局を務めるキタ歓楽街環境浄化推進協議会での活動をざっと列記するだけで、両手では抱えきれないほどの活動量です。ときには行政と連携し、行政の動きが遅いと感じると、自分たちだけで次々と課題解決に向けて取り組みを続ける難波さんは、これら以外にも、献血活動、家庭養護促進協会の里親制度のPR活動など、数え切れないほどたくさんボランティア活動に注力されています。また、ご自身が所属する業界団体でも、業界の地位向上のために積極的に活動をおこない、団体を横断する協働事業をおこなうなど、まさに縦横無尽のご活躍。いったい、いつ寝てるのかしら？

「青色防犯パトロールは、最初は兎我野町だけをパトロールしていたけど、今は北野地域全体でやっています。まちの区分けなんて、お客さんには関係ありませんからエリアがひろがったぶん、活動してくれる人も増えました。今は3班で交代しながらやっています。酔っぱらいに絡まれることもあるし、身体を張らなければならぬ場面もないわけではないので、気軽に誰でもお誘いできる活動ではないんですが、今では、地域内のホテルやパチンコ店の従業員の方も参加して下さっています。まちの活動に、住人だけでなく、そこで働いている人や、遊びにくる人が参加してくれるのは、とてもありがたいです。」

「兎我野町は、住んでいる人が少ないまちです。都心のと真ん中だけど、限界集落なんです。自分の役目を代わってもらえる人はいません。代わりはいないんです」という事実もありますが、それだけではありません。「子どもの頃から、一度は始めたことを途中で投げ出しはけないと言われてきました。はじめたからには、続けたいといけません。その教えを守り、なにかをはじめるときには、投げ出さない覚悟で挑むという難波さん。「聞いたらやってしまえまし、頼まれると引き受けてしまっ性分なんです。それに、人がやっているのを見ていただけっていうのはできないんです。血が騒いで、自分でやりたいんです。その性分が手伝って、どの活動も、誰よりもしっかりやっています。」

でも、難波さんは、やり続けます。まちと将来このまちで生きていく子どもたちのために。「青色防犯パトロールのような活動を自分子どもに引き継ぎたくないんです。そのためには、今、がんばるしかないんです。」

(棚橋真理)

「住んでいないのに、わざわざ来てくれる人は、熱い人が多いですね。住人は、やりたいという熱意より、やらないといけないという義務感のような思いになりがちですが、外から来てくれる人はそれぞれに個別のモチベーションをお持ちです。そういう人を大切にしています。モチベーションは人それぞれ。誰かに言われてする活動は続きませぬ。」「義務感でする活動はともつらいです。まちをよくしていくには、住んでいる人だけでなく、地域に関わる人の力も必要だと語られます。梅田まち案内エスコートや落書き消しのようなイベント活動では、毎回ポスターやチラシをつくり、SNSで告知し、多くの参加者を募集しています。」

「住んでいないのに、わざわざ来てくれる人は、熱い人が多いですね。住人は、やりたいという熱意より、やらないといけないという義務感のような思いになりがちですが、外から来てくれる人はそれぞれに個別のモチベーションをお持ちです。そういう人を大切にしています。モチベーションは人それぞれ。誰かに言われてする活動は続きませぬ。」「義務感でする活動はともつらいです。まちをよくしていくには、住んでいる人だけでなく、地域に関わる人の力も必要だと語られます。梅田まち案内エスコートや落書き消しのようなイベント活動では、毎回ポスターやチラシをつくり、SNSで告知し、多くの参加者を募集しています。」

「兎我野町は、住んでいる人が少ないまちです。都心のと真ん中だけど、限界集落なんです。自分の役目を代わってもらえる人はいません。代わりはいないんです」という事実もありますが、それだけではありません。「子どもの頃から、一度は始めたことを途中で投げ出しはけないと言われてきました。はじめたからには、続けたいといけません。その教えを守り、なにかをはじめるときには、投げ出さない覚悟で挑むという難波さん。「聞いたらやってしまえまし、頼まれると引き受けてしまっ性分なんです。それに、人がやっているのを見ていただけっていうのはできないんです。血が騒いで、自分でやりたいんです。その性分が手伝って、どの活動も、誰よりもしっかりやっています。」

でも、難波さんは、やり続けます。まちと将来このまちで生きていく子どもたちのために。「青色防犯パトロールのような活動を自分子どもに引き継ぎたくないんです。そのためには、今、がんばるしかないんです。」

(棚橋真理)

## 私たちにはボランティアが必要だ

「兎我野町は、北区のなかでももっとも古いまちのひとつなんです。宿場町だった時代もあります。今は、歓楽街として有名です。昔も今も、たくさんのお客さんをお迎えするまちとして発展してきました。だからこそ、誰もが安心して楽しめるまちでないとイケないんです。危ないまちには、お客さんは来ません。そうなるからでは遅

「住んでいないのに、わざわざ来てくれる人は、熱い人が多いですね。住人は、やりたいという熱意より、やらないといけないという義務感のような思いになりがちですが、外から来てくれる人はそれぞれに個別のモチベーションをお持ちです。そういう人を大切にしています。モチベーションは人それぞれ。誰かに言われてする活動は続きませぬ。」「義務感でする活動はともつらいです。まちをよくしていくには、住んでいる人だけでなく、地域に関わる人の力も必要だと語られます。梅田まち案内エスコートや落書き消しのようなイベント活動では、毎回ポスターやチラシをつくり、SNSで告知し、多くの参加者を募集しています。」

「兎我野町は、住んでいる人が少ないまちです。都心のと真ん中だけど、限界集落なんです。自分の役目を代わってもらえる人はいません。代わりはいないんです」という事実もありますが、それだけではありません。「子どもの頃から、一度は始めたことを途中で投げ出しはけないと言われてきました。はじめたからには、続けたいといけません。その教えを守り、なにかをはじめるときには、投げ出さない覚悟で挑むという難波さん。「聞いたらやってしまえまし、頼まれると引き受けてしまっ性分なんです。それに、人がやっているのを見ていただけっていうのはできないんです。血が騒いで、自分でやりたいんです。その性分が手伝って、どの活動も、誰よりもしっかりやっています。」

でも、難波さんは、やり続けます。まちと将来このまちで生きていく子どもたちのために。「青色防犯パトロールのような活動を自分子どもに引き継ぎたくないんです。そのためには、今、がんばるしかないんです。」

(棚橋真理)



# 私たちにはボランティアが必要だ

あなたの個性を輝かせるための場所。自分が中心となって物事を進めるキッカケをつくることで、あなたの個性が輝く。そういう場所は、そこにはありません。(TJWK)ボランティアデザイナー



阪急うめだ本店9階の祝祭広場の階段にTJWK関西の作品を敷き詰める笹谷史子さん。

**自分の気持ちを押し付けるのは嫌です。そんな私が、それでも、東日本大震災の支援活動をしています。**

笹谷さんが代表を務める、TJWK (Think Of JAPAN While Knitting) 関西は、東日本大震災で親を亡くした震災遺児支援のための支援金を募るために、編みものをしているグループです。たくさんの方に小さなモチーフを編んでもらい、編んでいるあいだは被災地のことに思いを馳せようというも。10センチ角ほどのモチーフは、早い人だと10分程度でできるそう。そのモチーフをつないで、大きなブランケットやシヨールをつくり、販売し、売り上げの全額を「あしなが育英会」に寄付しています。この活動を関西で呼びかけ、はじめたのが笹谷史子さんです。

笹谷さんは、この活動をはじめたまで、ボランティアとは無縁でした。ボランティアに対して、自分の気持ちを押し付けているだけじゃないか、という思いがあったそうです。「自分が正しいことをアピールしているみたいで嫌なんです。そんなかっこ悪いことしたくないです」と、ボランティア活動と距離を置いていました。それなのにTJWK関西を立ち上げようと決めたのは、編みものをして、その作品を販売して、

## 笹谷 史子さん

<https://artico.jp/gwtk/>  
TJWK関西代表 / ネットアーティスト

お金を届ける仕組みに魅力を感じたから。こんな私でも、東日本大震災は、本当にとてもショックだったんです。自分に何が出来るだろうか？ 働いて、寄付するしかないんだらうか、編みもので何かできないのかって悶々としていたんです。そんなときにTJWKの活動ならいい！と思いました。人がつながって、最後はお金にして。お金だったら送っても困らないだろうって。そうして、震災から1ヶ月後の4月には、TJWK関西を立ち上げました。5月にはHPを開設し、編み図を公開し、全国の人に向けてモチーフの募集をはじめました。メーカーには糸の寄付を呼びかけ、作品づくりはじめました。モチーフづくりのイベントも開催し、初年度は、モチーフがどんどん集まり、作品もどんどん売れました。とはいえ、最初から順調だったわけではありません。「善意を扱うのは難しいです。はじめた頃は、編みかけのセーターや、お布団が届いたこともありました。送ってくれてありがたうではなく、使えないものは使えません」とはっきり言うことも大切だと話されます。ネットアーティストである笹谷さんにとっては、編みもの業界以外の人を巻き込むことも課題だったとか。今ではたくさん、多彩なメンバーが、「TJWK関西は、メンバーがしっかりしているんです。マンネリ化しないよう、モチーフを使ったワークショップを開催したり、マルシェを主催したり、活動に変化をつけることができたのは、多彩なメンバーが関わってくれているおかげ」と、「震災支援だけでなく、活動は楽しんでやりたいですし、みんなにも楽しんでやってほしいんです。その言葉通り、TJWK関西はいつも和やかで笑い声の絶えない場になっています。」続けることだけを目標にはしていません。「続ける笹谷さん。みんなが楽しんで活動している、だから続けているんですね。(棚橋真理)



早朝の阪急東通商店街でTNR活動をする山本光恵さん(左から3人目)とキタ飲食街環境浄化推進協議会の方々

**猫と人が共生できるまちを目指して。さくらねこTNRは、みんなで協力しあっています。**

## 山本 光恵さん

もんぱー店主  
お初天神さくらねこTNRプロジェクトリーダー

お盆の夜10時過ぎ、北新地の路上にノラ猫の捕獲器を持った山本光恵さんの姿がありました。さくらねこTNR活動です。飲食店がひしめくキタのまちには、じつはノラ猫がたくさんいます。猫は年間に2〜3回妊娠し、1回の出産で3〜6匹の子猫を産みます。繁殖した猫たちの糞尿や鳴き声は地域の問題になっています。また、飼う気はないけれども餌はあげるといふ無責任な人たちも多く、そのせいで地域内で軋轢が起きたりもしています。といって、殺処分という乱暴な措置は、動物愛護の観点からもとるべき措置ではありません。TNR活動というのは、飼い主のいない猫に対し、「Trap (トラップ) 捕獲する」「Neuter (ニュート) 不妊/去勢手術を施す」「Return (リターン) 猫を元の場所に戻す」という活動です。このプロセスを経た猫は、その印として耳先を桜の花びらのようにVカットし、「さくらねこ」と名付けます。繁殖を防止し、地域の猫、さくらねことして一代かぎりの命を全うさせ、飼い主のいない猫に関する苦情や殺処分の減少に寄与する活動です。

梅田界隈で、この活動を精力的におこなっているのが、山本光恵さん。捕獲器を仕掛けるといっても、ノラ猫のいそうな場所や活動している時間帯を把握し、その時間帯に捕獲器を仕掛けなければ、捕まるものはありません。そのせいで、捕獲器を仕掛ける時間帯が夜の10時や早朝6時になることもあります。同時に、協力病院に手術の予約をします。数時間後、捕獲した猫を捕獲器ごと病院に運び、手術が終わればまた元の場所に猫を戻します。捕獲器の洗浄もしなければなりません。さらに、里親になつてくれる人を探る活動も並行しておこなう場合があります。単なる猫好きだけではやっていけない、とても手間のかかる活動なのです。

「さくらねこになって元の場所に戻すことにご理解のない方もおられます。そういう方にもご理解していただきたい思いがあります」「私ひとりで行っているわけではないですよ。私ももともと前から取り組んでおられる方もいらっしやいます。猫好きの方、地域の方、餌をあげられている方、いろんな方の協力が必要不可欠なんです。」

猫問題にかぎらず、まちづくりでは、さまざまな立場の人たちが関わるために、ひとつの意見に対して反対意見が噴出することも多々あります。「地域の方々が協力して、みんなで問題に取り組んでいきたいですね。山本さんは、「みんなで」と何度も言います。まちづくりは自分が当事者であると同時に、みんなの問題なんだということ。私には曾根崎で生まれ育って、今も曾根崎で商売をさせてもらっています。だから、この曾根崎に少しでも恩返しをしたい気持ちがありますね。私は、猫のことならできると、猫問題をやります。みんなで手分けして、いろんな問題に取り組んでいけばいいじゃないですか。当事者として、きつぱりとそう語る山本さんなのでした。(ルイス)



# ホームレス問題を通じて、誰もが何度でもやり直すことのできる社会をつくりたい

<http://www.homedoor.org/>

認定 NPO 法人 Homedoor 理事長  
川口加奈さん



ホームレスの人たちに季節を感じてもらうイベント「&class」。前列左から2人目が川口加奈理事長。(写真: Homedoor 提供)

あなたがどこにいても、誰かのために何かをすることができたら、それがボランティア。(行政職員)

あなたがどこにいても、誰かのために何かをすることができたら、それがボランティア。(ミニミニデザイナー)

Homedoor(ホームドア)は、ホームレスの人々の特技を生かして自転車修理をおこなうシェアサイクル「HUBchari」などの就労支援事業をはじめ、生活支援事業や啓発支援事業など、誰もが何度でもやり直せる社会にするためにさまざまな活動に取り組む認定NPO法人です。

「HUBchari」においては、新梅田シティや大阪東急REIホテル前、中津のHUBchari事務局などにポータルを展開し、北区の自転車問題の解決にも寄与しています。また、2015年(平成27年)には「Googleイノベーションチャレンジ」にてグランプリ賞を受賞し、大きく報道されました。

理事長を務めるのは川口加奈さん。現在26歳。彼女自身もまた、2017年(平成29年)に日本青年会議所の「第31回人間力大賞」でグランプリを受賞しています。

「中学時代、通学電車の窓からあいりん地区が見えて、ホームレスの人の多さに驚いたのが最初です。親や周りの人たちはあのあたりは危ないと言うけれども、その根拠のない思い込みやホームレスの人々への偏見に違和感を感じました」。

その後、実際のところは、どうなんだろう?と、あいりん地区での炊き出しに参加したことをきっかけに、思春期の真っ只中にいた彼女は、ホームレス問題を真剣に考えるようになったと言います。中学2年生のときのことです。

ちょうどその頃、彼女と同世代の高校生たちが野宿者を襲撃し、殺害するという凄惨な事件が起きました。「社会のゴミを掃除してやっつて」と彼らがうそぶく記事を見て、川口さんはいよいよ意を決し

ます。

先生たちが話すよりも同世代である川口さんが話すほうが伝わるのではないかと考え、学校の定期集会でホームレス問題について語ります。さらに活動はとまることがなく、校内新聞を発行し、炊き出しの米を集める活動をおこない、あの手この手で活動をひるがえしてきました。

また、ボランティア・スピリット・アワードにも応募、ボランティア親善大使にも選ばれ、アメリカで1週間の国際会議に出席。世界には、なにもないぜ口の状況からでも、徒手空拳でひとりでも懸命に活動に取り組んでいる人がいることを知り、刺激に満ちた濃密な体験をすることとなったのでした。3000人のなかから選ばれた代表ということもあって、漏れた人のぶんも、中学・高校での活動で終えずに、引き続きがんばろうと思つたそうです。

思春期に社会の不条理を目の当たりにし、憤つたり疑問を持つたりすることは、誰も経験することかもしれません。でも川口さんのように、そのことが原動力となって、これほどまでに圧倒的にアクティブに活動をする人は、あまりいないように思います。そのときの彼女のモチベーションや心情は、どのようなものでしたのでしょうか?

「世間が思うホームレスの人たちのイメージと、自分が見てきたホームレスの人たちの実態は違う。そのギャップが大きくて、その差を埋めたかったという思いはありましたね」。

少し考え込みながらそのように静かに話す川口さんの雰囲気は、文字から受ける強い印象とは裏腹に、ごくごく自然に

そう思つて、そうしてきた、という自然体の姿なのです。この、気構えたところのなきが、折れることなく、ブレることもなく問題に取り組む続ける彼女の秘密なのかもしれません。

その後、彼女は、ホームレス研究が日本で一番進む大阪市立大学で労働経済を学び、そこで仲間とHomedoorを立ち上げることとなります。2010年(平成22年)4月のことです。

いつしか、「やっぱり私はホームレス問題を解決するために生まれてきたんじゃないか」との思いを強くするようになり、「ホームレス状態を生み出さない日本の社会構造をつくりたいと思つたんです。それはどんな社会かという点、失敗してもやり直せる社会のこと。ホームレス状態になつてしまつと、そこから抜け出せなかつたり、普通の暮らしができないような社会ではなくて、誰もが何度でもやり直しができる社会にしていきたいなと思つたんですね」と彼女は言います。19歳で自身のライフワークを定めたのでした。

「最初の頃は、方法論ややりかたがわからなかつたですね。思いはあるけれども、その思いを、うまく言語化できなかったところはありました」。

最初は、モーニング喫茶をあいりん地区で毎朝実施したり、釜ヶ崎のまち歩きなどをおこなっていました。ホームレス問題という大きな課題のなかで、どんなことをすればいいのか、ニーズを把握するために始めたことでした。

そんななかから誕生したのが、ホームレスの人たちの得意な自転車修理の技術を生かしたシェアサイクル「HUBchari」です。「私とおつちやんたちとは友だちみたいな

ところがあるんです。一緒に遊びに行つて、日常を一緒に楽しめる相手同士なんですよ。HUBchariもみんなの共有財産ですし、みんなで一緒に盛り上げていくパートナーなんです。だから、上下関係のようなものではなく、ただ発生させないようにしています」。川口さんは、そう語ります。

最後に、漠然としていて、とても抽象的な問いかけではあるけれども、川口さんにとってボランティアとはなんなのかと聞いてみました。また、ライフワークを見つけていない人たちに向けてのワークも。

しばらく考え込んで彼女の口から語られたことは、こんなことでした。「Homedoorもボランティアといつたらボランティアなのかもしれないけれども、私はやっぱり、ボランティアをしているという意識はないですね。生活の一部というか、いつの間にかやつて、って感覚です。不満もないし、充実感もあります。必要とされている感覚も持てるし、今はベストな感じですね」。

ここでもまた、川口さんは自然体です。でも、たとえばやりたいことがわからなくて悶々としている人たちも、世の中にはたくさんいます。

「少しでも心に引くかかものものがあつて、やりたいな!と思うことがあつたら、そうだと思ひ込んで、まずは取り組んでみるのもいいかもしれませんね。やってみて、違ふと思つたら、方向転換したらいいし」。

ここにもまた、「誰もが何度でもやり直せる社会をつくりたい」というHomedoorの思いが飛び出します。そういうことなのですね。(ルイス)

佐川さんは  
どうして今日もどこかの  
ボランティアに  
参加しているのだろうか？

### 佐川治己さん

今日も明日もボランティアで生活のリズムをつくる

「今日はありがとございました」。北区でさまざまなボランティアを掛け持ちする佐川治己さん自身が、その日のボランティアを終えたあとに発する言葉です。そこに込められているのは、「自分のやりたいことをやらせてくれて、ありがと」という思い。「ボランティアは、自己満足のためです」と、潔く言い切ります。

そんな佐川さんがボランティアを志したのは、40代半ばを過ぎた頃。当時は鉄鋼会社に勤務していましたが、「金もうけのための仕事はもういい」という思いが募り、定年退職後は当時住んでいた東大阪の日本語教室でボランティアをはじめました。佐川さんにとって、今やボランティアは生活の中心になっています。月曜日と水曜日は済生会中津病院の入院受付の案内係、土曜日はデイサービスのボランティア。こうしてボランティアを中心に、1週間の生活のリズムをつくっているそうです。病院では、「看護師さんに入れ替わりがあるので、今は自分が一番よくわかってるんです」と、ロビーに立ち続け、自ら患者さんに声をかけています。その



（松岡慧祐）

他にも、地域の防犯委員を引き受け、青パトに乗って防犯パトロールをしたり、夏祭りの警備をしたり、社会福祉協議会のイベントの手伝いをしたり、草野球の審判をしたりと、常にボランティアに奔走しています。

佐川さんは、なぜそこまでするのでしょうか？「今までいるんな人の世話になってきました。だから、その恩返しがしたいんです」と、佐川さんは語ります。しかし、その根っこにあるのは、昔から旅が好きで、海外旅行の経験は40回以上、そして、車に乗るのも好きという「趣味」の精神。それが日本語教室や青パトのボランティアにつながっています。趣味が高じて、なんとオーストラリアのゴールドコーストで2ヶ月間、老人ホームでボランティアをした経験も。そのため、そこに「奉仕」という意識はなく、むしろ「ありがと」という言葉が自身の口をつくのです。「日本人はボランティアに頼るのが下手やと思います。遠慮せず、もっとうまく使ってほしい」というのが佐川さんの持論。「ボランティア命。こんな生き方をするアホもおるんですよ」と笑う佐川さん自身が、まだまだボランティアを欲しているようです。(松岡慧祐)

「やるからには徹底的にやる」  
そんな田村さんの  
徹底的な人生を教えてください

### 田村健蔵さん

北区バラの会会長

北区役所玄関前に、手入れの行き届いた心がほっこりする花壇があります。やったことがある人はおわかりかと思いますが、花の手入れって、すごく面倒だし根気が要りますよね。自分の花壇でも大変なのに、ましてや公共の花壇をボランティアで手入れするとなると、中途半端な気持ちでは無理です。それなのに、毎日のように花壇に向かい、コツコツと手入れをしている人がいます。北区バラの会会長の田村健蔵さんです。

田村さんは、小学生の頃、クラスのボス格と毎日のようにけんかをし、毎日のように負けていたそうです。でも、諦めずに挑み続けた結果、いつの間にかいじめもなくなくなったんだとか。中学生になってからはじめた柔道は、がむしゃらに練習し、最後には府の大会で大将として団体優勝するほどに上達。「やるからには徹底的にやる。そうすることで、人は成長するもの」と実感したそうです。ボランティアをはじめたきっかけは35歳の頃。息子さんが所属していた地域の野球チームのコーチを引き受けたのが最初



（平井裕三）

です。当初は、仲間づくりのための野球を考えていましたが、ある人から「よう勝たんから、そんなことを言うんやろ」と言われ、火がつくことに(笑)。「やるからには徹底的にやる」がここでも頭をもたげるのです。でも、野球の知識はゼロ。ゼロながら、トリックプレーの研究をしたり、全員に各ポジションを守らせて相手の気持ちを理解させたりと、さまざまな工夫の結果、大阪市の大会で優勝するほどのチームに成長させるのです。

園芸に興味を持ったのは定年退職した頃のこと。当時、北区では誰も持っていなかったグリーンコーディネーターの存在を知ります。ここでも「徹底的に」が発揮され、なんと4回受験のうちに資格取得です。その縁もあって、北区バラの会で活動するうちに、「花を育てることは子育てと同じ。だったら面倒なことでもちゃんとやるよ」と思うようになったそうです。ここでももちろん、徹底的。「あいさつされると、世に役立つということが実感できて、やっていてよかったと思うよ」と語る田村さん。引退も考えているそうですが、熱く語る姿を見ると、これからも徹底的に続けていくのだろうと思えてなりません。(平井裕三)

## 私たちにボランティアが必要だ

「私は、大阪生まれ大阪育ちのアジア系大阪人です。在日チャイニーズとして大阪に生まれた施さんは、ご自身のことをそんなふう語りまします。大阪の多様な課題に立ち向かう「大阪を変える100人」会議「会議」をはじめ、さまざまな活動を通じてネットワークをつくり、適任者を引き合わせることで大きな力を生み出すなど、ネットワークの力で社会を変えようとしている人です。精神的に次々と課題に取り組んでいく施さんですが、その原動力はどこにあるのでしょうか？ 施さんのルーツに迫ってみました。



（行政職員）

子どもは中国人であることに違和感を覚え、自分に自信を持つことができなかったと言います。転機は、高校3年生のとき。ある日、クラスメイトが、自分はじつは韓国人であると、みんなの前でカミングアウトしたのです。そんな彼がクラスのリーダーになっていく姿に刺激を受け、施さん自身も中国人である自分が大阪で暮らすことの意味を考えるようになり、当時は少なかった中

ネットワークの力で  
静かな「革命」を  
起こそうとする  
施さんの原点はなんですか？

### 施治安さん

大阪を変える100人、会議 特別顧問

https://osaka100saiji.com/

国について学べる大学に進学。さらに日中国交正常化を機に伝わるようになった中国の情報を吸収することで、中国人としてのアイデンティティーを持つようになりまし。やがて施さんは、具体的な活動をはじめようになりまし。日本に暮らす中国人として地に足をつけたことをやろうと考えるようになり、日中友好の架け橋となるような活動にのめり込んでいきます。「でも、何をやっても社会は1ミリも変わらなかつたですね。当時の苦い時間を振り返り、施さんはそんなふう語りま。結局、大学卒業後はビジネスの世界にどっぷり浸かるように。

みんなの笑顔が見たいから！  
げんきカレー 本日200円

### 井上勝典さん

https://www.genki200.com/

aise株式会社 代表取締役

最近、「子ども食堂」という言葉を耳にする機会が増えました。同時に、ここ数年は子どもの貧困の問題がニュースでも大きく取り上げられるようになりました。ワーキングプアや一人親世帯の増加など、経済的な理由から家庭で満足な食事とれない子どもに温かい食事を提供する「子ども食堂」が注目を集めています。食材の寄付や地域のボランティアによる調理などで、無料、数百円で食事を提供するという仕組みが一般的です。先日、西天満を通りかかったところ、あるノボリが目にとまりました。そこには「げんきカレー 本日200円」「心がげんき 体がげんき 地域がげんき」とありました。地域がげんき？ 私は引き寄せられるようにして、そのお店に入っていきます。するとそこには、驚きの光景が。セルフサービスの当然として、食器は使い捨ての容器、さらに水やお茶は有料です。カレーを安く提供するために、極限まで無駄を省いているのです。厨房でカレーをつくっているのは、オーナーの井上勝典さん。守口市で経営して



（平井裕三）

いる高齢者介護サービスの傍ら、子どもの貧困の問題に関心を寄せていた井上さんは、ご自身の住まいがある地域で、子どもたちが気軽に集まれる場をつくりたいと考えるようになりまし。なぜ、カレー屋さんだったのでしょうか。「子どもたちが来やすく、続けられるのは食べもの屋さんです。メニューは、子どもたちが大好きで、栄養もあるものと考えると、やっぱりカレーですね。」「西天満はオフィスや専門学校が多いので、屋はサラリーマンや学生さん、夕方には子どもたちが集まるような場所にしたいなと考えて、はじめまし。」「家庭の事情で代金を払えない子どもには無料で提供することもあるのですが、あえて「子ども食堂」と名乗らないのは、貧困家庭の子どもたちだけが来る場所というイメージが難点だと考えてのこと。子どもの貧困対策でひるまっただ「子ども食堂」ですが、「げんきカレー」では、さらに、地域の人が集まる「場」としても機能させていきたいと考えているようす。「空腹」に加え、子どもたちの「孤独」という問題にも踏み込む井上さんは、今日も子どもたちの笑顔に励みにカレーをつくり続けます。(平井裕三)



# 私たちにはボランティアが必要だ

あなたにとってボランティアとは？

ボランティア活動をするときは、もちろんやる気を持って従事しますが、ときどきしんどい時もある。楽しいばかりでもないです。(被災地支援経験のある大学職員)

ボランティア活動をするときは、もちろんやる気を持って従事しますが、ときどきしんどい時もある。楽しいばかりでもないです。(被災地支援経験のある大学職員)

ボランティア活動をするときは、もちろんやる気を持って従事しますが、ときどきしんどい時もある。楽しいばかりでもないです。(被災地支援経験のある大学職員)



ECC 社会貢献・国際交流センターのボランティアコーディネーターたちと。前列は山本花恋さん。後列左から岡本留美子さん、東口千津子先生、小西友貴さん、井上紗央利さん。

「PEACE」に込められた ECC 社会貢献・国際交流センターの活動理念

学園がある中崎町一帯の清掃活動や、環境問題を考える活動。また、中崎町キャンパスナイト、豊崎ピクニックでの「子どもみこし」づくりなど地域との取り組み。小児科病棟でのクリスマス会の企画・運営、フイリピン子どもたちの応援や、地域社会の課題を解決する社会起業家の支援などなど。ECC 社会貢献・国際交流センターが取り組んでいるさまざまなボランティア活動は、挙げればキリがないほどです。「こういうセンターを教育機関のなかに持てること自体がありがたいですね。それに、地域の方々にもお世話になり、育てていただいています。ありがたいことです」と語る東口千津子先生に、お話を聞いてきました。

## 東口千津子さん

学校法人山口学園学生相談室本部責任者  
ECC 社会貢献・国際交流センター副責任者

年には社会貢献・国際交流センターとなり、活動は学園全体にひろがりを見せていきます。「山口学園の理念には『豊かな社会、平和と幸福を希求してやまない、こころ豊かな社会人の育成をはかる』とあります。社会貢献は学園の理念と合致していることでもあり、社会に開かれた学園であるためにも、全学園で取り組もうということになりました。東口先生とセンターの取り組みを貫く理念は、『PEACE』に集約されています。『PEACE』(Physical Balance) からだの健康/E (Emotional Balance) 心の健康/A (Action for Community) 社会貢献・ボランティア活動/C (Communication・Cooperation・Collaboration・Commitment) T (Training) エン・協力・協働・協同・責任・参加/E (Empowerment・Environment) エンパワメント・環境。これらを組み合わせた『PEACE』と山口学園の理念をもとに、平和で幸せな社会を創るひとりひとりでありたい。Inner peace は world peace につながっていく」と東口先生は語ります。



大淀東地域のイベントでアンパンマンに扮し、ひと際目立って子どもたちの人気を集めるキクちゃんこと菊川昇社長

菊川昇さん

「こんなに安くてインカ帝国!!」の菊川モーターズ社長

あなたにとってボランティアとは？

ボランティア活動に従事するときは、もちろんやる気を持って従事しますが、ときどきしんどい時もある。楽しいばかりでもないです。(被災地支援経験のある大学職員)

ボランティア活動に従事するときは、もちろんやる気を持って従事しますが、ときどきしんどい時もある。楽しいばかりでもないです。(被災地支援経験のある大学職員)

### キタのええもん

### キタの手みやげ

## 天満切子で培った技術でつくられた 『切子工房昌榮』のロックグラス



「切子工房 昌榮」  
【所在地】 大阪市北区西天満 5-14-7 和光ビル 103  
【電話】 06-6131-0100  
【メール】 shoei@yacht.ocn.ne.jp  
【営業時間】 9:00~17:00  
【定休日】 日曜・祝日  
※教室の詳細は直接お問い合わせ

大阪天満宮には「大阪ガラス発祥之地」と刻まれた石碑が建てられています。江戸時代、オランダから輸入されたガラス製法が天満宮に伝わったのが発祥とされ、天満のガラス業は昭和初期には最盛期を迎え、ガラス製造関連の工場や問屋がたくさん軒を連ねていました。その後は時代の変化とともにガラス加工所も減っていきませんが、そんななか、最後のガラス加工所を営んでいた宇良武一さんが、天満の地からガラスの灯を消すまいと、試行錯誤を繰り返して、大阪ならではの切子「天満切子」を誕生させます。その宇良さんのもとで学ばれた西川昌美さんが、このたび、西天満に「切子工房昌榮」をオープン。目玉は、天満切子で培った技術を使ってつくりあげたオリジナルの切子のロックグラスです。

この、側面のカットがまた難しい。削りすぎてもいけないし、削りが少なすぎて光が入らなくなるのでダメ。そのバランスが難しいのだそう。飲みものを注ぐと、また違った表情を見せませす。「底の模様は側面の削っている部分に映し出されるんです。西川さんがグラスに水を注ぎはじめると、グラスのなかに万華鏡のような光の花が現れ、まるで魔法のように美しく変化しはじめるのです。」

「光の映り込みを見ながら使ってもらおうのが天満切子。だから、飾っとくだけやなく、ドンドン使ってほしいという思いでつくっています」と西川さん。観賞用の美ではなく、用の美を備えた芸術的なカットグラスこそ、天満切子の魅力です。まさに、「使ってなんぼ!」の大阪らしい切子です。そんな天満切子の魅力に魅せられ、宇良さんのもとで腕を磨いてきた西川さんがつくられるオリジナルのロックグラスは、側面からの映り込みが二重にも三重にも見えて、とてもきれいです。削りが深く、ロックグラスらしい、どっしりとした重厚感があります。西川さんの師匠である宇良さんが亡くなられたのは2015年のこと。「宇良先生からは、すべてを学ばせていただきました。亡くなられてから学ぶことも多くて、そのときにはわからなかったことも、あとなんてから、あのときにおっしゃっていたのはこういうこと。今になって、自分のためになっていることがわかると思います。宇良さんがそうだったように、西川さんもまた、切子の技術を後世に伝えるべく、「切子工房昌榮」では、教室も運営されます。「伝えるのは、伝統工芸を学んだ者の使命。切子の技術を楽しんで伝えていけたら。また、自身は、「映り込みがきれいで、シンプルでかっこいいものを。もっともっと極めて、妥協することなくつくりたいですね」と、追求する職人気質をのぞかせます。新しい工房から、素晴らしいカットグラスが生まれることを期待しています。(ルイス)



## マルホ株式会社の 「子守唄—いのち—」像



地下鉄御堂筋線中津駅から徒歩すぐ、大淀警察署の隣に「マルホ株式会社」の本社ビルがあります。マルホ株式会社と聞いてもピンとこない方でも、保湿のための塗り薬「ヒルドイド」は見聞きしたことがあるのでは? マルホ株式会社は、「ヒルドイド」に代表される皮膚疾患のための医療用医薬品の製薬会社です。市販薬の取り扱いがないこともあり、メディアに出ることはほとんどありませんが、塗り薬の生産量は日本一を誇ります。そのマルホ株式会社の本社ビルの玄関口に、女の子の像があります。「子守唄—いのち—」像。この像の女の子は、頭に手拭いを巻き、幼子を背負っています。右手には風車を持ち、背中の幼子をあやしているのです。はんでんを着足元には草履。なんだか、意味深長な像なのです。会社の玄関口にある像がなぜ、このような幼子を背負った女の子の像で、「子守唄—いのち—」なのでしょう? 会社の事業とどう関わっているのでしょうか? マルホ株式会社さんにお話をうかがいました。

「この像が表しているいのちは、まさに弊社が大切にしているものなんです。」詳しくうかがうと、会社の願いは、「生命の根源である健康に奉仕する医薬品づくりを通じ、心豊かな充実した人生をもちたい」というもの。それはつまり、命を大切にすること。中村晋也氏によると、「戦後の目覚ましい高度経済成長を遂げた日本がまだ貧しかったころ、田畑で働く母親に代わって子守をするのは、

小学校1~2年生からの姉の仕事でした。小さな肩に幼子を背負って、『ねんね半纏』でくるみ、あやしている姿は、地方の民謡にもよくうたわれています。風車であやす少女の表情に、命の大切さと、貧しさに負けない明るさを込めて表現しました」とのこと。「命の大切さ」を表したこの像は、そのまま会社の思いを伝える像ということ。この像のほかに、社内にはいろいろなモノユメントがあるそうで、彦根工場には、ベルリンの壁の一部やベルリンの熊があつたりと、長年取引のあるドイツのドクトル・カーデ社との深い関わりを彷彿とさせるものもあるのだとか。それでも、創業者の像はどこにもないそう。「会社の歴史や創業者のこと、先輩の思いは、社史に残しています」「1959年(昭和34年)から、社内報を発行していますが、長いあいだ、週刊で出していました」というコメントからも、創業者の思いや考えは、言葉にして伝える風土があるのようです。1997年(平成9年)にこの像が建てられたときにも、もちろん社内報で取り上げられました。さらに、2007年(平成19年)に製作者の中村氏が文化勲章を受章された際にも、あらためて社内報で取り上げられました。そのせりもあってか、社歴の長い人には、愛着のある像なのだそうです。さまざまなキャリアの社員が増えた今でも、変わらずに会社の思いを伝える存在として、この像はあり続けます。個人の像のように直接的ではありませんが、やはり、強い思いが込められた像なのです。(棚橋真理)



## Quiyoxの イラストマップ



『踊る大阪』抜粋 (Quiyox) <http://quiyox.com/>

地図は現実を忠実に再現するものであると思われがちですが、そんな既成概念を打ち壊すようなマップが、北区から生み出されています。その作り手とは、大淀在住の建築デザイナーであるQuiyoxさん。本誌第3号「行け!大淀号」に掲載された「大淀マップ」の作者といえば、お気付きの読者もいるのではないのでしょうか。その大淀マップは、いわゆる「鳥瞰図」のスタイルで鳥の視点から立体的に描かれています。このような鳥瞰図は、現実をありのままに捉えるべく写実的に描かれるのが一般的。しかし、Quiyoxさんのマップは、現実のまちを対象としながらも、大胆にデフォルメされ、現実には存在しない空想上のキャラクターや物語のイラストで埋め尽くされているのが大きな特徴です。Quiyoxさんがこれまでに描いてきたまちは、北京、ミラノ、バルセロナ、ニューヨークなど、子どもの頃に憧れた未知の世界。当時、空を飛ぶ夢をよく見ていたそうですが、知らないまちに行こうとすると、必ず夢から覚めてしまいました。そのときにかき立てられた想像力が、こうした表現の原動力になっています。

そんなQuiyoxさんにとって、まちはフアンタジーの「舞台」。「ゴチャゴチャした絵だからこそ、バランスが大事」と、見る人の視線を左右に誘導すべく全体の構図を緻密に計算するさまは、まるで舞台の演出家のような。その魔法にかかれば、身近な大阪のまちも、演出された舞台と化します。それが「踊る大阪」と題された作品。大阪府全域をひとつの舞台に見立て、そのうえで命を吹き込

まれたさまざまなキャラクターや建物が生き生きと踊っているように見えます。Quiyoxさんによれば、マップをこうして演出するのは、「デザイナーとしてのサビースピリット」から。「マップを見る人はどこを見るかわからない。だから、どこを見ても楽しめるように」と、バランスに配慮しながら、細かいイラストを所狭しと散りばめています。「絵がうまい人はたくさんいますが、テクニクだけでは見る人の記憶に残りません。僕はハートに訴えかけるものを描きたいんです。そんな思いで、Quiyoxさんは鳥瞰図に空想を盛り込み、「現実」と「虚構」を両立させています。その意味で、これは「ポケモンGO」の流行を先取りしたものであったと言ったこともできるでしょう。そして、普段は建築デザイナーとして、コンベというがんにがらめにとって、「虚構」は、描きたいものを自由に描ける逃げ道なのだそうです。そんなQuiyoxさんの作品は、「地図」ではなく「絵図」と呼ぶほうがしっくりくることも事実。それでも、方角や位置関係には一定の注意が払われており、一種の「イラストマップ」と呼ぶこともできそうです。そもそも、地図は正確かつ客観的に描かれるものであるという考え方は、近代に確立されたものにすぎません。Quiyoxさんの主観的なイラストマップは、そんなリアリズムに縛られた私たちに、地図はもっと自由で多様な表現であるということを示し、そんな地図を通して見れば、現実をもっと楽しくなるということを見せてくれるのです。(松岡慧祐)



## 阪急中津駅と 12枚の 『さかなっつハイ!』の看板



2005年(平成17年)春まで、阪急中津駅に『トンさかなっつハイ!』の看板広告がズラツと並んでいたことを覚えていませんか? 正式名称『トンさかなっつハイ!』は神戸市東灘区の東洋ナッツ食品株式会社が製造・販売している人気商品です。このコラムのインタビューのために神戸へとかう私の脳裏には、忘れかけた過去が去来していました。「まさか25年来的謎が解ける日が来るとは!」。25年前、当時高校生だった私はこの看板を見たとき、「さかなっつハイ」と独り言をつぶやく、ちょっと変わった少年でした。きつと『さかなっつハイ!』と『なかっつ』を掛けて、中津駅を選んだに違いない。当時の私は、心からそう信じて疑いませんでした。あれから四半世紀、平井少年の疑問を、大人になった平井記者が確かめにいく…。私はひとり高揚感に浸っていたので、

対応していただいた広報の倉内さんは、入社8年目。「私も看板の話は聞いていますが、入社したときにはすでに撤去され、実際に見たことがないんです。今も大阪のお客さんから、あの看板のナッツ屋さんでしょ、とかの確率で言われますよ。看板は発売初年の1986年(昭和61年)8月から2005年(平成17年)3月までの20年間出していました。すべての契約期間ではありませんが、端から端まで12枚すべて『さかなっつハイ!』だった時期があり、みなさんの記憶に残っているようですよ。」いよいよ、平井少年(当時)の疑問をぶつけるときがやってきました。もしや掲示場所を中津駅にしたのは『さかなっつ』と『なかっつ』を掛けてですか? 苦笑する倉内さん。「おそらく関係ないと思います。当時の担当者がいないので詳しくはわかりませんが、代理店から勧められたと聞いています。そうなんです。語呂はまったく関係ないんですね…。少し残念。倉内さんは続けます。「オリジナルキャラクターを入れることができました。中津駅の12枚の看板もそれだけ期待が高かったということですね。期待されて登場した商品だったんですね。『ナッツ』という食品は、栄養価が高く優れた食品なのに、酒のつまみと思われていました。ファミリー向けとして売り出すため、ミックスマッシュに魚を加え、食べきりサイズのポーションパック(小袋)を採用した画期的な商品だったんです。『原材料にサイズを揃えた小粒のピーナッツを使用するなど、素材も厳選しました。また、形も重さもまったく異なる素材が均一に配合されるよう、専用の機械をわざわざつくったんですよ。おかげさまで2015年(平成27年)に発売30周年を迎え、当社を代表する商品になりました。ありがたいございました。平井少年(当時)も満足しました。東洋ナッツ食品の敷地内にはアーモンドの木がたくさん植えられていて、春には桜に似た美しい花が咲くそうです。多くの人が花見に訪れるアーモンドフェスティバルは、神戸っ子に愛されているそうです。(平井裕三)

タオルでつくった犬のぬいぐるみ、フェルトのクリスマスオーナメント、ブルトップをフェルトでつなげてつくったワニ、ベッ トボトルキャップと牛乳パックでつくった帽子、折り紙のコマ、四季の花々…。これだけの種類を並べてみても、ほんの一例。数々のかわいらしい作品をつくっているのは、ボランティア団体「マスコット・クラブ」です。

マスコット・クラブでつくられた作品は、子育てプラザや地域のデイサービスのお誕生日会のお祝いの品として贈られます。一度に贈る作品は100個から200個。もちろん、すべて手づくりです。ほかにも、北区役所のロビーで月に一度開催されるボランティアカフェや、区民カーニバル、北区福祉ふれあいフェスタ、北区社会福祉協議会の北ボラまつりなど、さまざまなイベントにも参加し、参加者と一緒に作品づくりをする活動もしています。この精力的な活動を先導しているのは、マスコット・クラブの代表、西方千晶さんです。

### 定年退職、ボランティア活動のはじまり

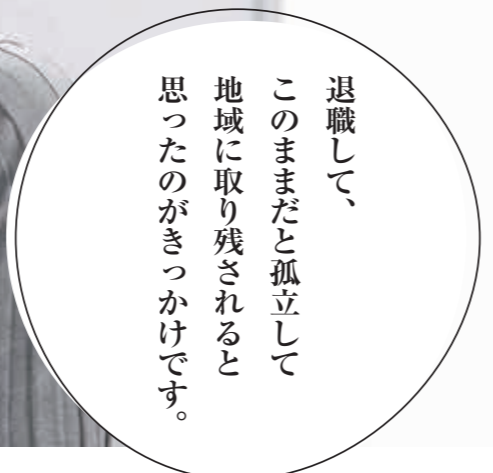
千晶さんは、1943年（昭和18年）生まれ、佐賀県唐津市の出身。同郷のご主人の転勤に伴い、大阪、名古屋を経て、再び大阪に戻ってきました。2人の子どもを育てながら自身も会社員として長年働いてきました。そんな千晶さんは、大阪で定年退職を迎えたとき、危機感ともいえる思いを抱えていたと言います。「住んでいる周りに、お友だちがいなかったんです。子どもはもう成人していて、PTAとか、子

どものことで人と知り合うこともなくなっていました。その頃は、住んでいるマンションで近所付き合いもなかったんです。このままだと、孤立して、地域から取り残されると思いました。」

向かったのは、北区役所。「特に何ができないというわけではないんですけど、地域のお手伝いで、できることはありませんか？」と、相談に行ったら、社会福祉協議会を紹介されたんです。それがはじまりですね。それから、「大阪府高齢者大学校に1年通い、シルバードバイザー養成講座やいちょうカレッジにも通いました。合計3年くらい。大学の先生なんか来られて、専門的なことが勉強できるんですよ。地域のこととか、歴史、パソコンも。社会貢献や健康というのもありましたね。OB会にも入っていますよ。」このとき一緒に受講していた人たちは、今でもお互いの活動に参加しあったりしています。「折り紙もね、このときの、石切の友だちの教室に通っているんですよ」とまちのことを知り、ボランティア活動を始めるうえでの基礎が勉強できて、いろんな地域に同じように活動する友だちもできたと言います。その後、菅原町にあったシルバードバイザーセンターで活動するなど、個人でさまざまなボランティアをしてきました。

### マスコット・クラブ「輪に和になろう」

マスコット・クラブを立ち上げたのは4年前のこと。大阪老人クラブ連合会内で活動されていた縫いものとマスコットづくりの団体が解散するのを機に、有志が集まって



退職して、  
このままだと孤立して  
地域に取り残されると  
思ったのがきっかけです。



聞き手・書き手・撮影／棚橋真理

マスコット・クラブを立ち上げました。当初5人だったメンバーは、今では18人に増えました。クラブの合言葉は、「輪に和になろう」。輪になって、和やかに活動している、ということなのでしょう。「輪になるのが好きです。輪に和にです」と話されます。「若い人が増えてきたのはうれしいですね。これまで、みんながやってみたくていいけれど、なかなか進められなかったことが、どんどん実行できるようになりました。こんなものをつくりたいっていうのはあるんですけど、すぐに試作してくれる人がいてくれると、弾みがつくでしょう。私も一緒にあれこれできて、楽しいんです」と活動のひろがり喜びつつ、楽しんでいきます。「毎週集まっています。最近では月に一度、脳トレもはじめたんです。10時から15時までずっと下を向いて集中しているので、15分だけでも違うことをすると、リフレッシュできるでしょう」と、メンバーがクラブを楽しんでいくための工夫も欠かしません。クラブでは毎回、作品づくり、イベントのキットづくりと時間はいくらかあっても足りないほどなんだとか。「10時スタートなのに、みんな9時半には来て、今か今かとはじまるのを待っているんですよ」。

### マンションでの、ひとり活動

千晶さんが長年続けている活動のひとつに、エコキャップ集めがあります。ペットボトルのキャップを集める活動です。自宅のあるマンションの掲示板に毎月ポスターを貼り出したり、知り合いに声をかけています。「2、3個でも持ってきてくれる子どももいます。持ってきてくれた人には、折り紙の作品をプレゼントしています。特に子どもは、お返し折り紙をとっても喜んでくれるんです。これまで渡したのもも保管してくれていますね」。不在時には、玄関のドアノブに集まったエコキャップが入った袋が掛けてあるそうです。

ります。「ボランティアって持ち出しでしょう。まず材料費がかかるし、それに場所代もとなるとすごい費用になるんです。だからできるだけ場所代がかからないようにして、自宅で教室をしたこともありますね」。マンション内での折り紙教室は今後も続けたいそうで、マンションの集会所が使えないか計画しているところだそうです。千晶さんのマンション内での活動は、もともと身近に、毎日顔を合わせる人に声をかけるところからはじまって、ひろがっていきます。千晶さんの活動をうかがっていると、マンション暮らしは隣近所の付き合いが希薄になりがち、というのは思い込みなのかもしれないとすら思えます。

### まず声をかけてみる

そんな千晶さんの活動を見て応援してくれる人もいます。「同じマンションの方で、毎月四天王寺さんにお詣りに行ったときに、折り紙を買ってきてくれるおばあちゃんがあります。あなたがしている活動を知ってるよ、応援するねって言ってくださるんです」。ほかにも、行きつけのお寿司屋さんでは、レジ前でエコキャップ集めをし、毎月集まった個数を数えて、掲示もしてくれています。「お客さんにも声をかけてくれていて、毎月たくさん集めてくれるんですよ」。デイサービスでもエコキャップ集めをしてくれています。「デイサービスに行くときは、いつも、利用者さんに会うのは久しぶりなのでおひとりずつ声をかけていくんです。今日のおやつはこれだよ！とかお話ししていくんです」と、キラキラした目で語られます。ひとつひとつの出会いを大切に、輪をひろげていく千晶さん。千晶さんの活動を応援することで、周りの人たちも思いがけずその活動に参加しています。

す。後日、エレベーターなどで「こないだ、掛けといたよ」と声をかけられることもあるそう。「うちに持ってきてくれるのは、みんな口コミですね。今度持ってきてねって声をかけるんです」。千晶さんのボランティア活動は、ご近所の人と声をかけあうきっかけになり、マンション内でのコミュニケーションづくりにもなっています。そのほかにも、毎年春になると、幼稚園や小学校の新生児のために朝のお見送り活動をしています。「マンション内だけなんですけどね、毎朝、いつてらっしゃって見送るんです。子どもはね、あいさつしてくるようになります。誰に言われてはじめてたとか、誰かと一緒にしているとかではないんです。ひとりです」。はじめた当初は困惑されたそうですが、今ではすっかり定着しました。「もともと子どもが好きなんです。遅くまで遊んでいる子がいたら、もう帰りなさいって声をかけることもありますよ」。

朝だけでなく夕方まで！「今では、学校帰りに家の鍵を忘れた子どもがうちに来て、親が帰ってくるまで待たせて言ってきたりします。お母さんが迎えに来るまで、うちでゲームしていたりするんです。走りまわってベッドでジャンプしたりね」と。子どもを通じてその親御さんともあいさつをするようになったり、お話をするようになりました。そこから仲良くなって、家族ぐるみのお付き合いをしているところもあります。「煮物をつくるときには、5軒分つくるんですよ。4軒配るの。ふたり暮らしなのに、いつつも大鍋ですよ！」「仕事であちこち行く人が、行った先の地元野菜をたくさん買ってきてくれたりね、それも何かつくってお返ししたりします」。退職して孤立するかもしれないと心配していたのが信じられないほど、今ではすっかりご近所付き合いを楽しんでいます。子ども向けに、折り紙教室をすることもあ

持ちを伝える千晶さん。お話ししていると、前のめりになって聞いてしまい、ついつい「一緒にやってみましょう！」と言ってしまふこと請け合いです。ワクワクして、一緒にやってみたいと思わせる人なのです。そんな千晶さんの影響でボランティアをはじめたのは、もともと身近にいるご主人でした。

いつも「杜協に行ってくる」と言ってお出かけていた千晶さん。あるとき、ご主人から「いつまで経っても字がうまくなれないね」と言われました。「私、お習字とかに通っていないし、何のこと？」と思って聞いていたら、「杜協」を「写経」だと思っていたんです。それから話がはじまって、今ではバルーンアートをやってるんですよ。厳しい人だったのに、すっかりニコニコしたおじいちゃんになってね」。

それぞれ別の団体を活動していますが、ボランティアという共通点があるため、自宅でもいろいろなお話ができるそうです。「今日行ったところ、弁当が出たんだよ！」とか「あそこは思っていたより駅から遠いよ」とか、ボランティアをしていればこそ気になるちょっとしたことを分かち合ったり、一緒に喜べるんだそうです。「家の棚がね、一列がバルーンで、もう一列がマスコットの棚になってるんですけど、どっちもパンパンです」。充実ぶりはちゃんとカタチになって表れていました。

「やることがたくさんあるのは励みになります。毎日予定を書いた紙をポケットに入れた持ち歩いているんです」と千晶さん。取材日の予定をうかがったところ、朝の10時の時点ですでに3件目でした。マスコット・クラブは今年も4月をはじめに、いくつものイベントに参加しています。先々の予定を見越して、マスコットの新作も計画中です。次はどんなものが生み出されるのか、楽しみは増える一方です。（終）